

# 白居易の寓言詩

## 流動の美学

松 本 肇

唐代を四つの時期に分けて、初唐・盛唐・中唐・晩唐と名付けたのは、明の高標の『唐詩品彙』に始まる。この分類法は盛唐を絶頂期と見なす文学認識に基づいており、現在の文学史にもそのまま適用されている。盛唐期が李白・杜甫を頂点とする文学の全盛時代であるとしても、このような文学観を盲目的に信奉するところに文学研究の進歩はない。他人の敷いたレールの上を歩くのは容易だが、本当にそうなのかという疑問を絶えず突き付ける努力を忘れてはならないだろう。近年、高標の四唐説に異議を唱える論が提出され、とりわけ中唐期の文学に熱い視線が注がれるようになったのも、そのような努力の持続の結果に他ならず、中国文学研究の発展のために喜ばしい動向と言えよう<sup>〔1〕</sup>。

白居易、字は楽天。中唐を代表する詩人の一人である。中唐は寓言詩の全盛時代であり、『白氏長慶集』に収める諷諭詩は寓言作品としてのすぐれた価値を持つ。白居易の諷諭詩を寓言文学という視点から考察するのが本稿の目的である<sup>〔2〕</sup>。

## 一 潔癖剛直の人

## (1) 潔 癖

青年は常に純粹なものに憧れる。純粹なものを守り通して生きるのが難しいと知ったときから、恐らく本当の人生が始まるのだが、この純粹なものへの希求心は、どのような境遇にあつても、人間として忘れてはならないものの一つである。白居易の次の詩を見てみよう。

一株青玉立 一株青玉立ち

千葉緑雲委 千葉 緑雲委む

亭亭五丈余 亭亭たり 五丈余

高意猶未已 高意 猶未だ已まず

山僧年九十 山僧 年九十

清浄老不死 清浄なれば老いて死せず

自云手種時 自ら云う 手ずから種うる時

一顆青桐子 一顆の青桐子と

直從萌芽拔 直きことは萌芽より抜き

高自毫末始 高きことは毫末より始まる

四面無附枝 四面 附枝無く

中心有通理 中心 通理有り

寄言立身者 言を寄す 身を立つる者

孤直当如此 孤直 当に此の如くなるべし

「雲居寺孤桐」(卷一・二)と題する詩。雲居寺は長安の南の終南山にある寺の名で、そこの庭に高くそびえる

桐を詠じたもの。雲居寺の桐はすでに十分な高さを持ちながら、それでも空に向かってどこまでも伸びて行こうとする。余分な枝もなく真中に木目がきちんと通っている。ここに描かれた、真直ぐ伸びる一本の桐は、白居易自身の純粹な志の投影に他ならない。

「通理」は、木目の通っていることを指すが、『易』坤・文言の「君子黃中通理、正位居體。美在其中、而暢於四支、發於事業。美之至也」に基づく語。黄色が五行の中央の土の色であるように、君子は中庸の美德を保つて筋道がよく通り、尊い位に居て謙遜の姿勢を失わない。美德が内部にあれば、手足の動きや事業となって現われるものだ、というのが大意。ここで、「通理」の語が、内部の美德の強調と結び付いていることに注意しよう。すなわち、白居易は真直ぐそびえる一本の桐の姿を通して、人間は心の中に美德を持たなければならないこと、心の中の美德は立派な事業（政治）に反映されることをアピールしたのである。

花房英樹『白氏文集の批判的研究』はこの作品の制作年次を、元和元年（八〇六）と元和六年（八一）と推定している。

貞元十九年（八〇三）の春、白居易は三十二歳で書判拔萃科の試験に友人の元稹と共に合格し、秘書省校書郎を授かるが、元和元年（八〇六）、三十五歳で校書郎を辞め、元稹と共に華陽觀に合宿し制科の試験をめざして受験勉強に没頭する。そして、同年四月、元稹と共に才識兼茂明於体用科に合格し、監厩県尉となった。元和二年（八〇七）、三十六歳で京兆府試官、集賢殿校理を勤め、十一月、翰林学士を授かった。元和三年（八〇八）、三十七歳の四月には左拾遺となった。天子に過失があるとき、それを諫める官である。元和五年（八一〇）、三十九歳の四月、左拾遺の任期が終わると、翰林学士の職に就いたまま、収入の増加を理由に京兆府戸曹參軍に転出。そして、元和六年（八一）の冬、服喪を終えて長安に出、皇太子の教育係である太子左贊善大夫となった。元和九年（八一四）、四十三歳の冬、服喪を終えて長安に出、皇太子の教育係である太子左贊善大夫となった。宮廷内では余り重要でない官職の一つである。元和十年（八一五）、四十四歳の六月、宰相武元衡暗殺事件が発生、白居易は上書して犯人の逮捕を要請するが、越権行為と見なされて、八月、江州司馬に左遷される。十月、

江州到着。この江州左遷が白居易の文学に大きな転機をもたらすことになるのである。

ところで、前掲花房説に対し、顧学頤、周汝昌選注『白居易詩選』は、「雲居寺孤桐」を元和四年（八〇九）前後の長安の作と見なしている。元和四年と言えば、白居易三十八歳。左拾遺の職にあつて、使命感に燃えながら「新樂府」を制作していた時期に当たると。前進することしか知らない純粹な詩魂の輝きは、上昇期の白居易の作品にふさわしいと言えるかも知れない。

「白牡丹詩（和錢学士作）（卷一・二）」は、世間の人々が紫と紅の牡丹をもてはやし白い牡丹を嫌うのに対し、白い牡丹の純潔（純潔）を愛する心情を歌う詩である。ひっそり咲いた白い牡丹の美質を讃えた部分を引用すると、

憐此皓然質 憐れむ 此の皓然の質

無人自芳馨 人無くして自ずから芳馨なり

衆嫌我獨賞 衆は嫌えども我独り賞し

移植在中庭 移し植えて中庭に在り

留光夜不暝 光を留めて夜暝からず

迎光曙先明 光を迎えて曙先ず明らかなり

対之心亦靜 之に対すれば心も亦靜かに

虛白相向生 虚白 相向つて生ず

『虚白』は、『莊子』人間世の「虚室生白」に基づく語で、純白の心にとえる。白い牡丹が白居易の純潔の投影に他ならないことは雲居寺の孤桐と同様であろう。ただし、「白牡丹詩」が「雲居寺孤桐」と異なるのは、白い牡丹の美質を讃えた後で、「始知無正色、愛惡随人情。豈惟花独爾、理与人事并。君看入時者、紫艷与紅英」のように、俗惡な世間への反発を記すことにある。自註に見える錢学士とは、錢徽、字は蔚章で、大曆十才子の一人錢起の子。元和の初めに入朝し、元和六年まで翰林学士を勤めた（『旧唐書』卷一六八）。白居易もまた、元和二年（八〇七）十一月から元和六年（八一）四月まで翰林学士を勤めており、この間の作と見るのが妥当で

あろう。王汝弼選注『白居易選集』(上海古籍出版社、一九八〇)が、同じ題名の「白牡丹」(卷一五・848)の詩に「白花冷澹無人愛、亦占芳名道牡丹。応似東宮白贊善、被人還喚作朝官」と歌っているのを根拠に、いずれも元和九、十年(八一四、八一五)の間、すなわち白居易が下邳退居後に太子左贊善大夫となった時の作と見なし、<sup>(1)</sup>「此詩爲自況自嘲之作」と述べているのはうなずけない。「憐此皓然質、無人自芳馨」と、「白花冷澹無人愛、亦占芳名道牡丹」との間には大きな落差がある。後者が自嘲の作であるのは見やすいが、それに対して前者は自負の作と見るべきだろう。

花の色の好き嫌いは人の感情で決められる、世の中のことと同じ道理だ、と述べるのは社会への憤りを表すものだが、このような不条理の告発は白居易自身が高潔な生き方を貫いているという自負を前提にしなければ成立しにくい。同じ白い牡丹を詠じながら、自負から自嘲へと変容して行く過程こそが、翰林学士から太子左贊善大夫に転落した白居易の意識の落差を反映していると言うべきだろう。<sup>(2)</sup>

白居易は人一倍正義感の強い人間だった。彼は自分が正義を貫くばかりでなく、他人の悪を許せなかった。

種蘭不種艾<sup>(3)</sup> 蘭を種えて艾を種えず

蘭生艾亦生 蘭生じて艾も亦生ず

根荻相交長 根荻 相交つて長じ

莖葉相附榮 莖葉 相附して栄ゆ

香莖与臭葉 香莖と臭葉と

日夜俱長大 日夜 俱に長大なり

鋤艾恐傷蘭 艾を鋤かば蘭を傷つけんことを恐れ

溉蘭恐滋艾 蘭に溉がば艾を滋らせんことを恐る

蘭亦未能溉 蘭も亦未だ溉ぐこと能わず

艾亦未能除 艾も亦未だ除くこと能わず

沈吟意不決 沈吟して意 決せず

問君合何如 君に問う 合あはに何如にすべしと

これは「問友詩」(卷一・38)と題する詩で、元和元年(八〇六)と元和六年(八一二)の長安の作。蘭を植えると艾(よもぎ)が一緒に生える、香草と惡草が同時に生長してゆくジレンマを詠じたもので、正義と惡の同居を憎む潔癖な心情を物語っているよう。「和答詩十首」の「和松樹詩」(卷二・102)もまた、松と槐を比較し、「彼如君子心、秉操貫冰霜。此如小人面、變態隨炎涼」のように、氷や霜の中でも枯れない堅い操を貫く松を君子に、夏と冬で姿が変わる槐を小人になぞらえながら、

不願垂枝葉 枝葉を垂たれ

低隨槐樹行 低れて槐樹の行に隨うを願わず

松は槐の仲間になるのを望まない、と歌う(元和五年、長安の作)。ここにも、君子と小人の同居を憎む潔癖な心情が脈打っている。また、「有木詩八首」の其六(卷二・109)は、水榿(かわらやなぎ)という殆ど何の取柄もない樹木をテーマに、「唯有一堪賞、中心無蠹虫」——唯一の長所は樹心に害虫のいないことだ、と歌う(元和二年と元和六年、長安の作)。

これらはいずれも、正義を愛し不正を憎む白居易の潔癖さの現れと言つてよいだろう。

## (2) 剛 直

白居易の潔癖さは彼の剛直な態度と深く結び付いている<sup>⑩</sup>。彼は剛を肯定して柔を否定する。それを最もよく示すのが「折劍頭詩」(卷一・35)である。

拾得折劍頭 折劍の頭を拾得す

不知折之由 之を折りし由を知らず

一握青蛇尾 一握 青蛇の尾

数寸碧峰頭 数寸 碧峰の頭

疑是斬鯨鯢 疑うらくは是れ鯨鯢を斬るか  
不然刺蛟虬 然らずんば蛟虬を刺すかと

欠落泥土中 欠けて泥土の中に落ち

委棄無人収 委棄せられて人の収むる無し

我有鄙介性 我に鄙介の性有り

好剛不好柔 剛を好んで柔を好まず

勿輕直折劍 直折の劍を輕んずること勿れ

猶勝曲全鉤 猶曲全の鉤に勝れり

青蛇、碧峰は劍のたとえ、鯨鯢、蛟虬は悪人のたとえ。曲全は、『老子』二十二章に「曲則全」、『莊子』天下に「人皆求福、己独曲全」とあるのを踏まえたもので、世の中の動きに逆らわず身の安全を図るのをいう。体制順応型の人間のたとえ。折れても真直ぐな劍がよいと詠じる激情は、白居易の剛直な精神をよく物語っている。劍が剛直な詩人の比喩であるのは言うまでもない。

花房英樹氏がこの作品を元和二年（八〇七）〜元和六年（八一二）の長安の作と推定するのに対し、王汝弼『白居易選集』は元和五年（八一〇）の作と見なす。白居易は左拾遺時代、数々の諫言を行なった。宮女の解放や賄賂の禁止などを主張し、特に宦官の権力拡大に対して激しく抵抗した。元和四年（八〇九）、成徳節度使王承宗が反乱を起こすと、宦官の吐突承璀が総司令官となって反乱軍の討伐に向かった。このときも白居易は、軍権を宦官に委ねるべきではないと強く主張している。ただ、彼の宦官批判は余りにきびしかったために憲宗皇帝の反感を買い、辞職寸前にまで追い込まれる苦い経験を味わった。王汝弼氏の説は、このような背景を踏まえたものである。傷つくまで戦う決断と勇氣は、諫官時代の正義感に出ると言えるかも知れない。

「李都尉古劍詩」（卷一・10）は「折劍頭詩」と同じく、

至宝有本性 至宝にして本性有り

精剛無与儔 精剛にして与に儔する無し

可使寸折 寸に折れしむべきも

不能繞指柔 指を繞りて柔なる能わず

のように、剛直な剣を讀えながら、「願快直士心、將断佞臣頭。不願報小怨、夜半刺私讐」、剣は正義の人物が悪人を斬るためのもので、個人的な報復の手段に用いるべきではないと警告する。剣が悪人を攻撃する武器であるとする立場から、折れても真直ぐな剣がよいと認め、剛を肯定して柔を否定する態度は両者に共通している。更に言えば、この二つの剣が「折剣」であり「古剣」であるところに、白居易の孤獨な抵抗の姿勢が暗示されているように。なお、花房英樹氏は「李都尉古劍詩」を元和元年（八〇六）と元和六年（八一）の長安の作と推定するが、顧学頌、周汝昌『白居易詩選』は、元和三、四年（八〇八、八〇九）頃とし、挫折を恐れず国家の大事を論ずべき諫官の任務を比喻した作品と見なす。妥協を許さぬ戦闘性は諫官期の作品にふさわしいと言えるだろう。白居易が剣を愛するのは、その直線的なイメージに惹かれるためである。彼は植物でも、真直ぐに伸びる植物、とりわけ竹を愛した。例えば、「酬元九对新栽竹有懷見寄」（卷一・三）では、「始嫌梧桐樹、秋至先改色。不愛楊柳枝、春來軟無力」のように、梧桐の変節、及び楊柳の権力追従と対比しながら、「曾將秋竹竿、比君孤且直」と、元稹の「孤直」を竹になぞらえて讚美する（元和五年、長安の作）。雲居寺の孤桐が「孤直」の語によって理想化されていたのを思い起こそう。また、「有木詩八首」は殆どが有害な樹木を詠じたものだが、其八（卷二・二〇）だけは丹桂の美質を讃えている。その中に「匠人愛芳直、裁截為厦屋」「重任雖大過、直心終不曲」と見えるのに注目。「孤直」「芳直」「直心」などに表れた、植物の直線的なイメージは、白居易の剛直な精神の反映に他ならない。

### （3） 真実の交友

これまで植物と剣を詠じた詩を取り上げて、そこに刻み付けられた白居易の潔癖と剛直について眺めてきたが、それは彼自身の生き方の原則そのものであった。金谷治氏は、「白楽天の精神」（東北大『文化』一九一一、一九



五五)の中で、「彼が純粹なまごころで真実の生き方を求める人であった」と書きながら、まごころの発露を「諫官としての真摯な態度と、友情の濃やかさ」に認めている。白居易は友情を大切にした。特に、元稹との友情は名高い。「寓意詩五首」其三(卷二・33)は、友情の崩壊をテーマにした詩だが、その後半で、兄弟のように親しかった友との訣別を次のように歌う。

君為得風鵬 君は風を得る鵬と為り

我為失水鯨 我は水を失う鯨と為る

音信日已疎 音信 日に已に疎く

恩分日已輕 恩分 日に已に輕し

窮通尚如此 窮通 尚此のごとし

何況死与生 何ぞ況んや死と生をや

乃知挾交難 乃ち知る 交を挾ぶの難きを

須有知人明 須らく人を知るの明有るべし

莫将山下松 山下の松を将て

結託水上萍 水上の萍に結託する莫れ

得意の友と失意の自己を比較し、輕薄な友情を傷みながら、友を選ぶ難しさを述べている。花房英樹氏は、元和二年(八〇七)と元和十三年(八一八)、長安の作とするが、王汝弼『白居易選集』によると、白居易の江州司馬左遷に友人楊虞卿の裏切り行為が絡んでいたと見る立場から、この詩は楊虞卿を諷刺したものだと言う。元和三年(八〇八)、白居易は三十七歳で楊虞卿のいとこと結婚している。身内同士の確執があつたのか、真相はさて置き、真実の交友を求める潔癖な心情を窺い知ることができよう。

#### (4) 貧賤の賛美と固守

白居易は寒門の出身である。彼は職場を変わる度に俸給の額を丹念に詩に書き留めた。このような金銭へのこ

だわりは、貧乏で苦勞した体験を根底に持つのではなからうか。貧乏は彼の敵に違いなかった。ところが、白居易には貧賤を讀えた詩がある。

富家女易嫁 富家の女は嫁し易く

嫁早輕其夫 嫁すること早くして其の夫を輕んず

貧家女難嫁 貧家の女は嫁し難く

嫁晚孝於姑 嫁すること晩くして姑に孝なり

富貴来不久 富貴は来るとも久しからず

倏如瓦溝霜 倏として瓦溝の霜のごとし

權勢去尤速 權勢は去ること尤も速やかなり

譬若石火光 譬として石火の光のごとし

不如守貧賤 貧賤を守るに如かず

貧賤可久長 貧賤は久長なるべし

前者は「秦中吟十首」の「議婚」(卷二・七)の一節で、元和五年(八一〇)、長安の作。富家の娘と貧家の娘を對比しながら、貧家の娘は晩婚だがしゅうとめに孝行、とそのメリットを強調する。後者は「寓意詩五首」其二(卷二・二)の一節。富貴や權勢が不安定で頼りないのに対して、貧賤こそ永遠、とその固守を主張する。貧賤というマイナス面を敢えて賛美し固守するこのような態度は、折れても真直ぐな剣がよいと詠じた剛直な精神と深く結び付いていよう。

白居易の尊敬した六朝の詩人陶淵明は、「詠貧士七首」を書いて、貧窮の中で自己の信念を貫いた人達の高潔な生き方を讀えた。また、六朝時代の隱者の伝記を繙くと、若い頃貧乏だったという記述が散見する。すなわち、貧賤というマイナス面は、反俗の証というプラス価を同時に内包しているのであり、白居易の主張がそのような

貧賤賛美の思想に立脚していることは言うまでもない。

貧賤というマイナス面を賛美した白居易には、更に進んで醜惡の美を描く作品がある。

## 二 醜惡の美

美しいものを美しいと感じ、醜いものを醜いと感じる。これは極めて健全な精神の働きであり、日常生活で誰もが普通に行なっていることだろう。だが、そのどちらに価値があるかということになると、簡単には済まない。例えば、「杏園中棗樹詩」(卷一・56)を見てみよう。

人言百果中 人は言う 百果の中

唯棗凡且鄙 唯棗凡にして且つ鄙しと

皮皴似龜手 皮皴んで龜の手に似たり

葉小如鼠耳 葉小さく鼠の耳のごとし

胡為不自知 胡為れぞ 自ら知らず

花生此園裏 花 此の園裏に生ずるや

豈宜遇攀翫 豈宜しく攀翫せらるべけんや

幸免遭傷毀 幸いに傷毀せらるるを免る

二月曲江頭 二月 曲江の頭

雜英紅旖旎 雜英 紅旖旎たり

棗亦在其間 棗も亦其の間に在り

如嬖對西子 嬖の西子に對するがごとし

東風不挾木 東風 木を挾ばず

吹煦長未已 吹煦して長く未だ已まず

眼看欲合抱 眼のあたり看る 合抱ならんと欲し  
得尽生生理 生生の理を尽くすを得たるを

寄言遊春客 言を寄す 春に遊ぶの客

乞君一廻視 乞う君 一たび廻視せよ

君愛繞指柔 君 指を繞らすの柔を愛さば

從君憐柳杞 君が柳杞を憐れむに従せん

君求悦目艷 君 目を悦ばすの艷を求めば

不敢爭桃李 敢えて桃李を爭わず

君若作大車 君若し大車を作らば

輪軸材須此 輪軸の材は此を須いん

この詩は最初の八句で、平凡野鄙ななつめのマイナスイメージを提示し、中間の八句で、美しい花となつめを美女と醜女にたとえてなつめの醜さを強調すると同時に、その生命力を讃え、最後の八句で、大きな車の材料には柳杞（やなぎ）や桃李よりなつめの木が役に立つと、最初に提示したイメージを反転させる。嬖は嬖母で、黃帝の妃の名。醜女だが賢才があり、こは、外見の醜さを述べると共に、内面的な美德を暗示する。西子は西施で、春秋時代の越の美女。「君愛繞指柔」は、劉琨「重贈盧諶詩」の「何意百鍊剛、化為繞指柔」に基づく。なお、杏園は長安城の南、曲江の西にあり、唐代に進士合格者の祝賀パーティーが行われた場所。霍松林『白居易詩訳析』（黑竜江人民出版社、一九八一）は、科擧の合格者が必ずしも有用な人材ばかりではなかったことを指摘しながら、この詩の制作動機を科擧の試験と結び付けている。試験の成績だけでは実力を判断できない不合理さは昔も今も変わらない。

「杏園中棗樹詩」が柔らかな柳杞や見栄えのする桃李と比較しながら、見かけの悪いなつめのメリットを強調したのに対し、見かけの悪いものの美点を逆の角度から強調したのが、次に掲げる「文柏牀」（卷一・〇三）である。

陵上有老柏 陵上に老柏有り

柯葉寒蒼蒼 柯葉 寒くして蒼蒼たり

朝為風煙樹 朝には風煙の樹と為り

暮為宴寢床 暮には宴寢の床と為る

以其多奇文 其の奇文多きを以て

宜升君子堂 宜しく君子の堂に升るべし

刮削露節目 刮削して節目を露わし

弘拭生輝光 弘拭して輝光を生ず

玄班狀狸首 玄班 狸首に狀り

素質如截肪 素質 截肪のごとし

雖充悅目翫 悦目の翫に充つと雖も

終乏周身防 終に周身の防に乏し

華彩誠可愛 華彩 誠に愛すべし

生理苦已傷 生理 已に傷るるに苦しむ

方知自殘者 方に知る 自ら残る者

為有好文 好文章有るが為なるを

この詩は前半の十句で、美しい模様があるためにベッドにされる柏の美質を描き、後半の六句で、その美しい模様が自己破壊の原因に他ならないことを述べる。「杏園中棗樹詩」が、なつめのマイナスイメージをプラスイメージに逆転させたのに対し、柏のプラスイメージをマイナスイメージに逆転させたのだと言える。ここには、見かけの悪いものが美点を持つのと反対に、見かけのよいものが災難に出会うという思想が表明されている。

その他、王昭君の悲劇を詠じる「青塚」(卷二・122)では、王昭君の美貌が不幸を招いたことについて、「美顔

不如醜」とまで書く。青塚は、王昭君の墓。

「文柏牀」と「青塚」はいずれも江州時代の作品である。前者について、佐久節『白楽天詩集』(統国訳漢文大成、文学部第九巻、国民文庫刊行会、一九二八)は「文柏牀を借りて隠然自ら貶謫を傷んだのである」と述べているが、白居易は自らの不幸をただ傷んでいるのではない。文柏牀の美質は自己破壊という悲劇を代償として初めて立証されるのである。高邁な理想は現実の前に敗北することによって自らの高邁さを証明するのだ、と言ったらいだらうか。すなわち、見かけのよいものが災難に出会うという考え方は、自己の才能を逆説的に誇示したものであることを見落としてはならないだろう。

醜惡なものに美を認める美醜観は、『莊子』の寓言に既に見られる。例えば、醜い支離疏(不具者)が片輪ゆえに寿命を全うする話(人間世)や、自分の醜さを自覚している旅館の醜女が、自尊心の強い美女よりも大事にされる話(山木)などである。『莊子』の寓言は「無用の用」や「無為自然の価値論」(福永光司『莊子』、新訂中国古典選、朝日新聞社、一九六六)を強調することによって、生命を守る方法を教えている。白居易の根幹にあるのもまた、「生命の充足への念願」に他ならない。彼はそれを「生生の理」(杏園中棗樹詩)と呼ぶ。白居易にとって、醜惡なものは決してそれ自体に価値がある訳ではなく、「生生の理」という指標に合致するからこそ貴いと認められるのだった。同じように、美しいものも決してそれ自体が非難の対象なのではなく、「生理苦已傷」(文柏牀)——「生生の理」を損なうゆえに否定されなければならなかったのである。

福永光司氏は、莊子の「グロテスクなものへの嗜好」について触れながら、「莊子の氣質と性格の中には本来、オーソドックスなもの、ノルマルなものへの反撥と抵抗があり、それが彼の思想に一つの根本的な特徴を与えているように思われるのである」と書いた(『莊子』人間世篇、一八四頁)。醜惡なものに美を認めるのは正しく抵抗の精神と呼ぶことができる。

## 三 時流への抵抗

白居易は音楽を愛好したが、彼の音楽愛好の態度にも抵抗の精神が脈打っている。

糸桐合為琴 糸桐 合せて琴と為す

中有太古声 中に太古の声有り

古声淡無味 古声 淡として味無く

不称今人情 今人の情に称わす

玉徽光彩滅 玉徽 光彩滅し

朱絃塵土生 朱絃 塵土生ず

廃棄来已久 廃棄せられて来已に久し

遺音尚冷冷 遺音 尚冷冷たり

不辭為君彈 君が為に彈ずるを辭せず

縱彈人不聽 縱い彈ずるも人聴かず

何物使之然 何物か之をして然らしむる

羌笛与秦箏 羌笛と秦箏と

これは「廃琴」(卷一・〇)と題する詩で、元和元年(八〇六)〜元和十年(八一五)の作。淡泊な音で現代人の感覚にマッチしないために、流行から取り残され、捨てられた琴を詠じている。朱絃は、赤い練糸の弦。『礼記』楽記の「清廟之瑟、朱絃而疏越、壹倡而三歎、有遺音矣」に基づく。赤い練糸の弦で瑟を演奏すると音が濁り、瑟の底の穴を大きくする(疏越)と音が緩やかになることを述べた文章で、祖先を祭るときの楽器の演奏方法が質素だったことを示す。琴と瑟が周代から尊ばれてきた雅楽の中心となる楽器であったのに対し、秦箏は、秦代に出現した楽器、羌笛は、漢代にチベットから輸入された外国の楽器。いずれも俗楽器である。それらの楽

器が時代の流行となつて、古典的な音楽が顧みられなくなった。白居易は見棄てられた琴の立場に立ち、伝統を否定する現代の音楽を告発する。「秦中吟十首」の「五絃」(卷二・88)もまた、古楽を尊重せず外国の音楽を愛好する現代人を、「嗟嗟俗人耳、好今不好古」と批判する。その他、「鄧魴張徹落第詩」(卷一・44)でも、「古琴無俗韻、奏罷無人聽」、俗っぽい音色がしないので聴き手のない古琴を描きながら、「衆耳喜鄭衛、琴亦不改声」、大衆がみだらな音楽を好んでも古琴はその音色を改めない、時流に迎合しない古代の楽器への共感を歌う。このように、時代の流行に反発して敢えて時代遅れの楽器を擁護する姿勢は、抵抗精神の現われと見なすことができる。

なお、白居易の音楽を題材とした諷諭詩について、小守郁子氏は「新樂府」の「五絃彈」(卷三・111)を取り上げ、推奨すべき古楽の印象がうすれ、忌むべき鄭声の魅力の方がつよく感じられてしまうと述べながら、「唯美的感性」と儒教的政治的理性との間に亀裂を生じている」ことを指摘する。一方、太田次男氏は、「批判の対象となる人や事物の美、長所などを讚美すれ」まで追求して、最後に反転してこれに批判の刃を向けるのが白氏の常套手段の一つである」と言い、新樂府流行の秘密を「美的要素とそれを抑制する力の二つの微妙な釣合」＝「善と美との内的格闘」に求めている。白居易における唯美的感性と儒教的倫理性の問題を考えると、「与元九書」(卷二十八・1786)に触れざるを得ない。

この手紙は、元和十年(八一五)、江州司馬に左遷された白居易が自己の文学観を披瀝したもので、その中で彼は、「長恨歌」が妓女の間にもで知れわたっていたことを記している。白居易自身は諷諭詩と閑適詩の制作に情熱を注いだ、そのような思惑とは裏腹に、大衆が彼に期待したのは「長恨歌」のようなエンタテインメントの作品に他ならなかった。彼にはそれが痛いほどよく分かっていた。否、白居易の本領はエンタテインメントの作品にこそあったと言わなければならない。知識人が大衆を啓蒙できると考えるのは大きな間違いだ。大衆は知識人が考えるほど無知な存在ではない。むしろ、白居易の本質を正確に見抜いたのである。白居易の諷諭詩の獨創性は、為政者ばかりでなく人民をも作品の享受者として想定した点にあるが、「与元九書」が伝えるように、大



衆は彼の諷諭詩を歓迎しなかった。その上でなお、諷諭詩を文芸作品として成功させるには、啓蒙的色彩を弱め娯楽作品としての色彩を強める以外に方法はなかったろう。大衆は白居易の諷諭詩に儒教精神による啓蒙などを期待しない。白居易の唯美的感性が諷諭詩の埒外に食みでてしまうのは、彼が何よりもそのことを自覚していたからであり、それは白居易の大衆に対するサービスピ精神の現われに他ならなかった。そして、そのことによつて白居易は政治的有効性と切り離された地点で、文学の自立性を守ることができたのである。

#### 四 寒門の悲哀と出世願望

白居易が寒門の出身であることは既に述べた。人は家柄を選んでこの世に生まれてくることはできない。この個人の力ではどうにもならないもののために人はしばしば苦しめられる。「悲哉行」(卷一・三)は晋の左思の「詠史詩」(『文選』卷二十一)に基づいて、寒門の悲哀を表白した作品である。白居易はそこで、栄達するためには身を粉にして勉強しなければならぬ貧乏な学者と、身分や財産を保証され遊びほうけてばかりいる貴族の子弟を対比し、それぞれ谷間の松と山上の若木にたとえながら、

山苗与澗松 山苗と澗松と

地勢随高卑 地勢 高卑に随う

古来無奈何 古来 奈何ともする無し

非君独傷悲 君が独り傷悲するのみに非ず

出身階級の差異はどうにもならないと嘆く。「百丈澗底死、寸莖山上春」と詠じる「続古詩十首」其四(卷二・三)も同様に、不条理な階級社会への憤りをぶつけている。無能な貴族の子弟が顯位に昇り、寒門出身者はどれほど才能があつても微官に甘んじなければならぬと、左思が嘆いた現実、そのまま白居易の時代の現実だった。

「羸駿」(卷一・三)は、すぐれた才能を持ちながら、世の中に受け入れられない悲しみを不遇な名馬に託して

歌う。

驕<sup>ひ</sup>驕<sup>ひ</sup>失<sup>は</sup>其<sup>の</sup>主<sup>を</sup>驕<sup>ひ</sup>驕<sup>ひ</sup> 其<sup>の</sup>主<sup>を</sup>を失<sup>は</sup>い羸<sup>い</sup>餓<sup>い</sup>無<sup>い</sup>人<sup>を</sup>牧<sup>ふ</sup>羸<sup>い</sup>餓<sup>い</sup>して人<sup>の</sup>牧<sup>ふ</sup>を無<sup>し</sup>向<sup>き</sup>風<sup>を</sup>嘶<sup>い</sup>一<sup>つ</sup>声<sup>を</sup>風<sup>を</sup>向<sup>き</sup>か<sup>つ</sup>て嘶<sup>い</sup>くこ<sup>と</sup>一<sup>つ</sup>声<sup>を</sup>莽<sup>ま</sup>蒼<sup>そう</sup>黄<sup>わう</sup>河<sup>が</sup>曲<sup>く</sup>莽<sup>ま</sup>蒼<sup>そう</sup>た<sup>り</sup> 黄<sup>わう</sup>河<sup>が</sup>の曲<sup>く</sup>踏<sup>ふ</sup>氷<sup>を</sup>水<sup>を</sup>畔<sup>を</sup>立<sup>ち</sup>氷<sup>を</sup>踏<sup>ふ</sup>み<sup>て</sup>水<sup>を</sup>畔<sup>を</sup>に立<sup>ち</sup>臥<sup>ふ</sup>雪<sup>を</sup>塚<sup>を</sup>間<sup>を</sup>宿<sup>す</sup>雪<sup>を</sup>に臥<sup>ふ</sup>し<sup>て</sup>塚<sup>を</sup>間<sup>を</sup>に宿<sup>す</sup>歲<sup>さい</sup>暮<sup>ぼ</sup>田<sup>でん</sup>野<sup>や</sup>空<sup>く</sup>歲<sup>さい</sup>暮<sup>ぼ</sup>れ<sup>て</sup>田<sup>でん</sup>野<sup>や</sup>空<sup>く</sup>し<sup>く</sup>寒<sup>かん</sup>草<sup>そう</sup>不<sup>ふ</sup>滿<sup>まん</sup>腹<sup>ふく</sup>寒<sup>かん</sup>草<sup>そう</sup> 腹<sup>ふく</sup>に滿<sup>まん</sup>た<sup>ず</sup>豈<sup>いかで</sup>無<sup>い</sup>市<sup>を</sup>駿<sup>を</sup>者<sup>を</sup>豈<sup>いかで</sup>駿<sup>を</sup>を市<sup>を</sup>う<sup>者</sup>無<sup>い</sup>か<sup>ら</sup>んや尽<sup>は</sup>是<sup>を</sup>凡<sup>を</sup>人<sup>を</sup>目<sup>を</sup>尽<sup>は</sup>く是<sup>を</sup>れ凡<sup>を</sup>人<sup>を</sup>の目<sup>を</sup>相<sup>あ</sup>馬<sup>を</sup>失<sup>は</sup>於<sup>に</sup>瘦<sup>を</sup>馬<sup>を</sup>を相<sup>あ</sup>るこ<sup>と</sup> 瘦<sup>を</sup>に失<sup>は</sup>し遂<sup>す</sup>遺<sup>い</sup>千<sup>せん</sup>里<sup>を</sup>足<sup>を</sup>遂<sup>す</sup>に千<sup>せん</sup>里<sup>を</sup>の足<sup>を</sup>を遺<sup>い</sup>す村<sup>むら</sup>中<sup>を</sup>何<sup>を</sup>擾<sup>を</sup>擾<sup>を</sup>村<sup>むら</sup>中<sup>を</sup> 何<sup>を</sup>ぞ擾<sup>を</sup>擾<sup>を</sup>た<sup>る</sup>有<sup>あ</sup>吏<sup>を</sup>徵<sup>を</sup>芻<sup>を</sup>粟<sup>を</sup>吏<sup>を</sup>の芻<sup>を</sup>粟<sup>を</sup>を徵<sup>を</sup>する有<sup>あ</sup>り輸<sup>を</sup>彼<sup>を</sup>軍<sup>を</sup>厩<sup>を</sup>中<sup>を</sup>彼<sup>を</sup>を軍<sup>を</sup>厩<sup>を</sup>中<sup>を</sup>に輸<sup>を</sup>り化<sup>を</sup>作<sup>を</sup>驚<sup>を</sup>駘<sup>を</sup>肉<sup>を</sup>化<sup>を</sup>して驚<sup>を</sup>駘<sup>を</sup>の肉<sup>を</sup>と作<sup>を</sup>す

驕驕は、名馬の名で、周の穆王の八駿馬の一つ。すぐれた人物にたとえる。「相馬失於瘦」は、「史記」滑稽列伝に引く「相馬失之瘦、相士失之貧」という諺に基づく。馬を鑑定するのに、瘦せているからといって軽視すると名馬の価値を見落とし、人を判断するのに、貧しいからといって軽蔑すると賢者の価値を見損なうの意。どんなにすぐれた名馬も、馬の真価を見抜く人物がいなければ、驚馬と同じように扱われてしまう。人間も同様で

あろう。どのように優秀でも、才能を正當に評価できる人間がいなければ、その才能は埋もれてしまう。

貞元十五年（七九九）の秋、白居易は二十八歳で宣州の郷試に合格した。このときの試験官は宣歙觀察使崔衍である。翌貞元十六年（八〇〇）の二月、白居易は進士に合格するが、この年、彼は宣州に行き、「叙徳書情四十韻上宣歙崔中丞」〔卷十三・613〕と題する就職依頼の詩を崔衍に書き送った。相手の人格を讀えながら自己を売り込むのは就職活動の常套手段である。この詩の中に、「相馬須憐瘦」の句が見えることから、王汝弼『白居易選集』は「羸駿」を貞元十六年（八〇〇）の作と見なす。花房英樹氏は元和五年（八一〇）、長安の作とするが、任官前の不安定な身分の時期の作品にふさわしいと言えるかも知れない。すぐれた才能を持ちながら世に受け入れられないのは、もちろん白居易一人の問題ではない。それは「王佐の才」を抱く者の「典型的な境遇」であり（錢基『論白居易的寓言詩』）、白居易の詠じる不遇の悲しみは、「封建時代の寒士の共通の憤怒」に他ならなかった（王汝弼『白居易選集』）。

ところで、すぐれた才能を抱きながら認められない名馬への同情の裏側には、寒門から這い上がろうとする激しい出世願望が貼り付いていよう。不幸な境遇に生まれついた者が、泥沼から抜け出そうと願うのは当然の成行きと言える。寒門出身の悲哀は、そこから逃れ快適な場所を求めて生きる方法の模索につながってゆく。

## 五 快適な場所を求めて

元和二年（八〇七）、白居易が藍屋県尉を勤めていたときの作品に「京兆府新栽蓮詩（時為藍屋尉趨府作）」（卷一・12）がある。

汚溝貯濁水 汚溝 濁水を貯え

水上葉田田 水上 葉田田たり

我来一長歎 我来つて一たび長歎す

知是東溪蓮 知る 是れ東溪の蓮

下有清泥汚 下に清泥の汚るる有り

馨香無復全 馨香 復た全き無し

上有紅塵撲 上に紅塵の撲つ有り

顔色不得鮮 顔色 鮮やかなるを得ず

物性猶如此 物性 猶此のごとし

人事亦宜然 人事 亦宜しく然るべし

託根非其所 根を託すること 其の所に非ざるは

不如遭棄捐 棄捐せらるるに如かず

昔在溪中日 昔 溪中に在りし日

花葉媚清漣 花葉 清漣に媚ぶ

今来不得地 今来りて地を得ず

顚領府門前 府門の前に顚領たり

昔は清らかな谷川に咲いていた美しい蓮の花が、京兆府のどぶに汚染されてやつれ果てた姿を見て、植えた場所がふさわしくないと嘆く。「花葉媚清漣」は、謝靈運「過始寧墅」(『文選』卷二十六)の「緑篠媚清漣」に基づく。どんな植物にも生育するのにふさわしい場所というものがある。人間も同様であろう。ここには、自分にふさわしくない場所に勤務したために、才能を発揮できずに苦しむ白居易の悲しみが刻み付けられている。

白居易の勤務した盩厔県は畿県(首都周辺の県)に属し、特別の待遇があった。しかも、秘書省校書郎↓畿県の尉↓監察御史↓拾遺↓尚書省の員外郎↓中書舍人↓中書侍郎と進むのが、当時の典型的な出世コースと言われ、白居易は順当にこのコースに乗ったのである。それにも拘らず、彼は何故、自分がふさわしくない場所にいると感じたのだろうか。平岡武夫氏は、「彼が県尉になった当時の作品には、一抹の不平憂愁の気が認められる」と書きながら、その理由を、それまで同じコースを歩んできた友人の元稹が秘書省校書郎からいきなり左拾遺に抜

擢された「地位の隔たり」に求め、「官界における地位の均衡が破れたことに対して、彼は複雑な感情をもつことを免れなかったであろう」と推察している。一方、王汝弼『白居易選集』によると、当時の京兆尹は苛斂誅求を政策とする酷吏ばかりで、白居易は彼等の支配下に組み込まれて意に染まぬ仕事を引き受けざるを得なかったのだと言う。恐らく、自分の職場に完全に満足している人間などいないのではなからうか。個人的には反対でも、組織の一員として担当しなければならぬ仕事がある。白居易にもそれは分かっていただろう。しかし彼には、不正を憎む人一倍強い正義感があった。そうであればこそ、諫官として自由に発言できる左拾遺の職を早く手に入れたいと願ったとしても不思議はない。もしも、白居易に元稹を羨む気持があったとするならば、「地位の隔たり」自体に対してではなく、不正を摘発できる環境を確保し得たためではなからうか。白居易が左拾遺になったのは、翌元和三年（八〇八）のことである。

「潯陽三題」(卷一)は、元和十一年（八一六）〜元和十三年（八一八）、江州時代の作品。その序文に言う。

廬山多桂樹、湓浦多脩竹、東林寺有白蓮華。皆植物之貞勁秀異者、雖宮囿省寺中、未必能尽有。夫物以多為賤、故南方人不貴重之。至有蒸爨其桂、剪棄其竹、白眼於蓮花者。予惜其不生於北土也、因賦三題以唁之。廬山に桂樹多く、湓浦に脩竹多く、東林寺に白蓮華有り。皆植物の貞勁秀異なる者なり。宮囿省寺の中と雖も、未だ必ずしも能く尽くは有らず。夫れ物は多きを以て賤しと為す。故に南方の人、之を貴重せず。其の桂を蒸爨し、其の竹を剪棄し、蓮花を白眼する者有るに至る。予、其の北土に生ぜざるを惜しむ。因りて三題を賦して以て之を唁う。

ふさわしくない場所Ⅱ「南方」にあるために大事にされない三種類の植物(桂・竹・蓮)の悲しみがテーマとなっている。これが江州に左遷された白居易の不遇感の投影であることは言うまでもない。彼はこの三種類の植物は「北土」こそが最もふさわしい場所なのだと歌う。「廬山桂」(61)は「上林園」、「湓浦竹」(62)は「汾晋間」、「東林寺白蓮」(63)は「長安城」というように。

それでは、他の植物の場合、最もふさわしい場所とはどこなのだろうか。例えば、「和答詩十首」の「答桐花

詩(卷二・103)では、誰も觀賞する人のいない山奥の桐は、

我思五丁力 我は思う 五丁の力もて

拔入九重城 抜きて九重の城に入れ

当君正殿栽 君が正殿の栽に当て

花葉生光晶 花葉 光晶を生ぜしめん

宮城に移植すれば光り輝くと述べ、「和松樹詩」(卷二・107)では、松(君子のたとえ)は槐(小人のたとえ)と一緒に植えるよりも、

尚可以斧斤 尚わくは 斧斤を以て

伐之為棟梁 之を伐りて棟梁と為すべし

殺身獲其所 身を殺して其の所を獲

為君構明堂 君が為に明堂を構えん

伐採して天子の明堂の建築材料とするのがふさわしいと述べる。ふさわしくない場所に置かれた悲しみは、ふさわしい場所を見つけないと願う情熱と表裏一体を成す。そして、この「ふさわしい場所を求める」営みこそ、白居易の文学を貫く重要なテーマに他ならなかった。

白居易は書いていよう。

人心不過適 人心 適に過ぎず

適外復何求 適外 復た何をか求めん

これは閑適詩の「適意二首」其(一)(卷六・236)の一節。適意は、心にかなうこと、快適さを求めること。ここに白居易の追求した理想が集約されている。ふさわしい場所とは、心にかなう快適な場所のことであり、快適な場所を求めるのは「自己を生かす」ためである。人間はすべてが人間らしく生きる権利を持っている。白居易には人生を豊饒なものにしたいと願う強い欲求があった。彼が寒門出身の悲哀を体験した分だけ、この欲求は一

層強かつただろう。

では、窮極の快適な場所とは一体どこにあるのだろうか。

既に植物を例に取って見たように、総体的には長安の宮城を頂点とする都会への意志を読み取ることができるかも知れないが、美しい谷川を理想とする「京兆府新栽蓮詩」のような例を無視する訳にはいかない。しかも、「東林寺白蓮」では、「欲収一顆子、寄向長安城。但恐出山去、人間種不生」と、長安に移植することに危惧を表明さえしている。

すなわち、植物にとって快適な場所は一定していないと言わなければならない。それでは、快適な場所が一定してないのは何故だろうか。植物の属性が異なるからだと言って済ませるのは皮相的な見方に過ぎない。ここに、白居易における変化と流動の思想が大きく関与しているのを見落とすことはできない。

## 六 変化と流動の思想

『左伝』閔公二年の記事によると、衛の懿公は鶴を愛し、大夫の車(軒)に同乗させていたと言う。もともと、それが国民の反感を買い、狄の国が攻めて来たとき、国民は、鶴を使えばよい、と言って戦おうとせず、衛の軍は敗れたのだが。白居易もまた鶴を愛した。

鶴有不群者 鶴に不群の者有り

飛飛在野田 飛び飛びて野田に在り

飢不啄腐鼠 飢えて腐鼠を啄まず

渴不飲盜泉 渴して盜泉を飲まず

貞姿自耿介 貞姿 自ずから耿介

雜鳥何翩翾 雜鳥 何ぞ翩翾たる

同遊不同志 遊を同じくして志を同じくせず

如此十余年 此のごときこと 十余年

一興嗜慾念 一たび嗜慾の念を興し

遂為矰繳牽 遂に矰繳に牽かる

委質小池内 質を小池の内に委ね

争食群鷄前 食を群鷄の前に争う

不惟懷稻粱 惟だ稻粱を懷うのみならず

兼亦競腥羶 兼ねて亦腥羶を競う

不唯恋主人 唯だ主人を恋うるのみならず

兼亦狎烏鳶 兼ねて亦烏鳶に狎る

物心不可知 物心 知るべからず

天性有時遷 天性 時有りて遷る

一飽尚如此 一飽 尚此のごとし

況乘大夫軒 況や大夫の軒に乗るをや

これは「感鶴詩」(卷一・38)と題する作品。堅い操を守る高潔な鶴(前半八句)が、欲望のとりことなって墮落する姿を描きながら(中間八句)、持つて生まれた性質も変化する時がある、と感想を記す(後半四句)。耿介は、堅く操を守ること。「楚辞」九弁に「独耿介而不随兮、願慕先聖之遺教」と見える。世俗に従わず、古の聖人の教えを模範とするのをいう。大夫軒は、衛の懿公の故事に基づく。高級官僚のたとえ。ここで見落としてはならないのは、「天性有時遷」という原理に従えば、鶴(高潔な人間)が鷄や烏鳶(低俗な人間)の仲間に墮落したのと反対に、鷄や烏鳶もまた鶴の仲間に昇格し得るということである。情況は絶えず変わるものなのだ。「大水」(卷一・39)の船頭は水害に乗じて金を儲けるが、「九月霜降後、水涸為平地」のように情況が変われば、いつまでも金儲けはできない。「寓意詩五首」其四(卷二・39)の、立派な御殿に棲む裕福なつばめも、あばら家



に棲む貧しいつばめも、秋になればどちらも南に帰らなければならぬ。「所託各暫時、胡為相歎羨」。同じ情況がいつまでも続くことはないのである。「読史五首」其三（卷二・95）では、乞食の子供が漢の大將軍となり、秦の大名（東陵侯召平）が年老いて瓜売りに身をやつす例（『史記』蕭相国世家に見える）を引き、世の中は目まぐるしく変化することを述べながら、

勢去未須悲 勢去るとも 未だ悲しむを須いず

時来何足喜 時来るとも 何ぞ喜ぶに足らん

寄言榮枯者 言を寄す 榮枯の者

反覆殊未已 反覆 殊に未だ已まず

と歌う。榮枯は永遠に反復する。情況は常に變化し流動するのだ。

例えば、『イソップ寓話集』を見よ。「二羽の雄鶏と鷲」では、雌鶏を手に入れる喧嘩に勝った雄鶏は、高い塀の上で勝どきを挙げたために鷲に捕まり、負けて暗い所に隠れていた雄鶏が目的を遂げたではないか。勝者が敗者に転じ、敗者が勝者に転じたのである。恐らく白居易は、情況が常に變化、流動するものであることを固く信じていたに違いない。それ故、絶えず動き、一定の状態に留まることのないものに執着するのは、彼にとって無意味に等しかった。喜びが長続きしないように、悲しみもまた長続きすることはない。このような變化と流動の思想こそ白居易の真骨頂と言っても過言ではない。彼が快適な場所を一箇所に固定しなかったのは、流動の美学という自己の信念を重んじた結果に他ならなかったのである。そして、このことは同時に、白居易がすぐれた平衡感覚の持ち主であることを物語っている。

## 七 平衡感覚——「動静交相養」

白居易の平衡感覚を最もよく示すのは、「動静交相養賦」(卷二十一・1408)と題する作品であろう。後世の八股文の濫觴（朱金城『白居易集箋校』）と言われるこの賦は、貞元十八年（八〇二）以前の長安の作としか分か

らないが、白居易の文学の位相を知るのに非常に重要な作品と言えよう。<sup>④</sup>

居易常見今之立身從事者、有失於動、有失於靜。由斯動靜俱不得其時与理也。因述其所以然、用自儆導、命曰動靜交相養賦云。

居易、常に今の身を立て事に従う者を見るに、動に失すること有り、静に失すること有り。斯に由りて動靜俱に其の時と理とを得ざるなり。因つて其の然る所以を述べ、用て自ら儆導す。命じて動靜交々相養うの賦と曰う、と云う。

序文でこのように述べた後、彼は動と静の運用の仕方について記す。その根底にあるのは、

天地有常道、万物有常性。道不可以終靜、濟之以動。性不可以終動、濟之以靜。養之則両全而交利。不養之則両傷而交病。

天地に常の道有り、万物に常の性有り。道は以て静に終わるべからず、之を濟うに動を以てす。性は以て動に終わるべからず、之を濟うに静を以てす。之を養えば則ち両ながら全くして交々利あり。之を養わざれば則ち両ながら傷なわれて交々病む。

という循環の思想である。動と静の循環をよく認識し、その運用に際しては時と理を正確に見極めなければならない。行動すべきではない時に行動すれば失敗するだろうし、逆に、静観すべき道理でないのに静観すればやはり失敗するだろう。

今之人知動之可以成功、不知非其時動必為凶。知静之可以立德、不知非其理静亦為賊。

今の人、動の以て功を成すべきを知るも、其の時に非ずして動かば必ず凶と為るを知らず。静の以て徳を立つべきを知るも、其の理に非ずして静ならば亦賊と為るを知らず。

時と理を重んじる動と静の運用の哲学は、白居易のバランス感覚の現れに他ならない。今、このことを発憤著書の説について見てみよう。

元和五年(八一〇)、白居易の友人元稹が江陵に左遷された。<sup>⑤</sup>このとき、元稹は白居易に十七篇の詩を書き送っ

たが、その発想と用語はこれまでの元稹の詩風と大きく異なっていた。白居易は元稹の作品に対して「和答詩十首」を書き、その序文（巻二・100）で元稹の詩風の変化について次のように推測する。

抑又不知足下是行也、天将屈足下之道、激足下之心、使感時發憤而臻於此耶。

抑又知らず、足下の是の行や、天將に足下の道を屈し、足下の心を激せんとして、時に感じ憤を發して此に臻らしむるか。

彼は元稹の「發憤」がその文学を前進させたと思ふ。「元稹において、官途の左降は、文学の進歩であつた」（平岡武夫『白居易』）と認める、發憤著書の説である。

一方、「讀史五首」其二（巻二・36）を見ると、

馬遷下蚕室 馬遷 蚕室に下り

嵇康就囹圄 嵇康 囹圄に就く

抱冤志氣屈 冤を抱いて志氣屈し

忍恥形神沮 恥を忍んで形神沮む

のように、司馬遷や嵇康の牢獄体験に触れ、恨みや恥が精神と肉体の衰退をもたらしたと述べながら、商山の四皓や許由・巢父などの隱者の、世の中に超然とした生き方を肯定する。これは發憤著書の説の否定に他ならない。恐らく、白居易の中で、一つの感情が突出しようとする、それを軌道修正する力が働くのではなからうか。これを平衡感覚と呼ばずに何と呼ぼう。そして、この平衡感覚は白居易の中立の思想として結実したのである。

白居易の中立の思想とは一体何だろうか。それは、「自己を正の方向であれ負の方向であれ、究極の状態に置くことを否定する」ことであり、「本来対立しあう関係においてすら、その中間の地点に己れの居場所を見付け出し、そこに安住しようとする」ことである。あるいは、曖昧の美学と呼んでもよい。ところで、このような中立の思想を白居易の人間関係と結び付ける見方がある。宋の葛立方『韻語陽秋』巻十六は、白居易が「有木詩八首」其八で自己を香り高い桂にたとえたことに触れて、次のように言う。

樂天素善李紳、而不入德裕之党。素善牛僧孺、楊虞卿、而不入宗閔之党。素善劉禹錫、而不入任、文之党。中立不倚、峻節凜然。於八木之中、而自比於桂、殆未為過也。

樂天、素李紳と善し、而るに（李）德裕の党に入らず。素牛僧孺、楊虞卿と善し、而るに（李）宗閔の党に入らず。素劉禹錫と善し、而るに（王）任、（王）叔文の党に入らず。中立不倚、峻節凜然たり。八木の中に於て、自ら桂に比す。殆ど未だ過ぎたると為さず。

白居易の友人は様々な党派に属していたが、彼自身はいずれの党派にも属さなかった。葛立方はそれを白居易の「中立不倚」と見なすのである。なお、王任、王叔文グループによって実施された永貞革新の時期には、白居易と劉禹錫はまだ知り合っていなかったと思われるので、劉禹錫に関する記述には誤認がある。それはともかく、白居易の中立がこのような人間関係を背景とした選択であると見なすならば、美しい友情の所産と呼べるかも知れない。だが、果たして本当にそうだろうか。私は、白居易ほど人間関係を大切にしたい男はいないと考えているが、他方で、もしも白居易の党派的中立が人間関係を重んじるための選択だとしたら、これほど人間関係を傷つけるものはないのではなからうか、という疑念の生じるのを押さえることができない。人は特定の立場を選ぶことによって他人を傷つけることはあろう。しかし、特定の立場を選ばないことによってまた、他人を傷つけるのだ。真の友情とは、自分の信じた友と行動を共にすることではないか。それを拒否することは、友を傷つけることに他ならない。他人の痛みを吸収する覚悟を抜きにしては、中立の思想など成立し得ないのだ。中立を貫くにはタフでなければならない。

さて、私が指摘したいのは、白居易が「養竹記」（卷二十六・「竹性直、直以立身。君子見其性、則思中立不倚者」と述べていることである。竹の剛直のイメージと「中立不倚」の結合に注意しよう。白居易の剛直については既に書いたが、彼の中立の思想もまた剛直の精神と同様の地平に立脚していることを見逃してはなるまい。

「養竹記」は貞元十九年（八〇三）、長安時代の作品である。江州左遷以後、中立の思想は白居易を貫く原理

となつたが、それが既に長安時代の作品に表れるのは一体何を意味するのだろうか。江州左遷は白居易の文学の重心を諷諭詩から閑適詩へと移動させた。その意味で、重要な転機だつたことに間違ひはない。しかし、白居易の本質は何も変化していない。彼は決して新しい文学の世界を発見したのではなく、中立の思想を根幹とする自己本来の文学の世界に回帰して行つたに過ぎないのである。

## 八 不条理を撃つ

潔癖剛直の詩人白居易は、世の中の不条理を激しく攻撃した。次に、彼がどのようなものに対して攻撃の刃を向けたのか見てゆくことにする。

### (1) 偽善者の狙撃

世の中に敵のない人間など恐らくいないのではなからうか。人が社会の中で生きてゆく限り、人間関係の網の目から逃れる訳にはいかない。この網の目の中で、敵と味方がおのずと峻別される。よい友を得たときの喜びは大きい。また、敵は、敵であることが分かれば戦いやすい。一番厄介なのは、味方のような顔をした敵である。白居易が「紫藤詩」(巻一・38)で描いたのは正にそういう種類の人間に他ならない。

藤花紫蒙茸 藤花 紫にして蒙茸たり

藤葉青扶疏 藤葉 青くして扶疏たり

誰謂好顔色 誰か謂う 好顔色と

而為害有余 而も害を為すこと余り有り

下如蛇屈盤 下りては蛇の屈盤するがごとく

上若繩綰紆 上りては繩の綰紆するがごとく

可憐中間樹 憐れむべし 中間の樹

束縛成枯株 束縛せられて枯株と成る

柔蔓不自勝 柔蔓 自ら勝えず

嫋嫋挂空虛 嫋嫋として空虛に挂かる

豈知纏樹木 豈知らんや 樹木を纏いて

千夫力不如 千夫の力も如かざるを

先柔後為害 先には柔らかくして後には害を為すこと

有似諛佞徒 諛佞の徒に似たる有り

附著君權勢 君の權勢に附著するも

君迷不肯誅 君迷いて肯て誅せず

又如妖婦人 又妖婦人のごとく

綢繆蠱其夫 綢繆して其の夫を蠱す

可憐壞人室 憐れむべし 人の室を壞り

夫惑不能除 夫惑いて除くこと能わず

寄言邦与家 言を寄す 邦と家と

所慎在其初 慎む所は其の初めに在り

毫末不早弁 毫末も早く弁ぜずんば

滋蔓信難図 滋蔓 信に図り難し

願以藤為誠 願わくは 藤を以て誠と為し

銘之於座隅 之を座隅に銘せんことを

美しい藤の花が植物に危害を加える例を引いて、佞臣と妖婦に注意せよと警告した詩。藤の花は美しい。しかし、その美しさに迷わされてはいけない。藤の蔓は柔らかい。その柔らかさが危険だ。それは一旦樹木に絡み付くと枯死させるほどの強い力を持っている。佞臣と妖婦も同様に、甘言と美貌によって国家と家庭を破壊する。

味方のような顔をした敵とは、こういうのを指すのだろう。味方と思い込んだ分だけ、被る損害も大きくなる。気を付けるのは早い方がよい。「滋蔓信難図」は、「左伝」隠公元年の「無使滋蔓、蔓難図也」に基づく。草がはびこると除き去るのがむずかしいのをいう。権勢が強大になると制することができなくなるたとえ。見かけのソフトな人間ほど危険なものはない。

『芸文類聚』巻八十二、草部下、藤に引く呉の沈瑩の『臨海異物志』によると、樹木に巻きついて枯らす「鍾藤」という名の寄生木がある。白居易の「紫藤詩」はそのような悪木のイメージを利用して、見かけの柔らかさに騙されてはいけないことを強調したのだろう。

その他、「有木詩八首」其三（巻二・113）では、「中含害物意、外矯凌霜色」、表面は堅い操を守っているように見せかけて、内部に危険な意志を秘めるからたち、其五（巻二・115）では、「愛其有芳味、因以調麴蘖。前後曾飲者、十人無一活」、香りがよいので酒に混ぜて飲んだところ、全員死んでしまった野葛（つたうるし）の害毒について詠じている。これらはいずれも、見かけのよさとは裏腹に、実際は人に危害を加える偽善的な人間を告発した作品である。

## （2）賢者の受難

白居易は「哭劉敦質」（巻一・16）で「愚者多貴寿、賢者独賤述」と詠じた。愚者と賢者を比較しながら、賢者の視点に立つて賢者の不遇を悲しんだのである。昔から、すぐれた才能を持ちながら、世の中に認められない人間は数多い。否、世の中に認められない受難を代償とすることによってのみ、賢者は賢者としての価値を立証するのだとさえ言えるだろう。「寓意詩五首」其一（巻二・90）は、明堂の建築資材に認可された予樟（くすのき）が伐採間近に山火事に出会い、「養材三十年、方成棟梁姿」の努力の甲斐もなく、あつという間に灰となった悲劇を描くもので、「不悲焚燒苦、但悲采用遲」という結びの句には、人材登用の時期を見誤った為政者への非難がこめられている。既に触れた「羸駿」の詩（四、寒門の悲哀と出世願望）もまた、賢者の受難という同様の主題を有している。

## (3) 惡の氾濫

人間にとつて、惡とはよほど魅力のあるものなのだろう。恐らく歴史上で、惡の氾濫しなかった時代などないのではなからうか。「題海圖屏風」(元和己丑年作)(卷一・二)は、海底から大亀が出現して大混乱に陥る海の光景を描いた屏風に書きつけた詩、「蝦蟇詩」(和張十六)(卷一・五)は、害惡をもたらすばかりで何の取柄もないがまを詠じる詩である。前者については、元和己丑年(八〇九)の自註があることから、この年、河北藩鎮王承宗を討伐するために、憲宗が宦臣吐突承璀に全指揮權を委ねたことへの諷刺と見るのが大方の説であり、後者についても、錢基「論白居易の寓言詩」が「紫藤詩」と同様に、朝廷に居座つて国事を操る宦官に対する諷刺であると述べている。ここでは、海底から出現して暴れる大亀も、泥の中をはいまわる汚いがまも、惡の氾濫の象徴とだけ言っておこう。

世の中には様々な惡がある。どんな小さな惡も見過ぐすといつか大きな被害をもたらす。惡の芽は小さな内に摘み取るのがよい。

婆娑園中樹 婆娑たる園中の樹

根株大合圍 根株 大いなること合圍

蠹爾樹間虫 蠹爾たる樹間の虫

形質一何微 形質 一に何ぞ微なる

誰謂虫至微 誰か謂う 虫至微なりと

蠹蠹無已期 蠹蠹 已む期無し

孰謂樹至大 孰か謂う 樹至大なりと

花葉有衰時 花葉 衰うる時有り

花衰夏未実 花衰えて夏に未だ実らず

葉病秋先萎 葉病みて秋に先ず萎む



樹心半為土 樹心 半ば土と為る

観る者 安んぞ知るを得ん

借問虫何在 借問す 虫何くにか在る

在身不在枝 身に在りて枝に在らず

借問虫何食 借問す 虫何をか食らう

食心不食皮 心を食らいて皮を食らわず

豈無啄木鳥 豈啄木鳥無からんや

蜚長将何為 蜚長きも將た何をか為さん

これは「寓意詩五首」其五（卷二・20）。どんなに立派な木も虫に食われれば枯れてしまう。小さな虫でも油断はできない。その小さな虫は、木を確実に倒す方法を知っている。それは木の幹に棲み着いて樹心を食いつくすことだ。そうすれば、きつつきがいても何の役にも立たない。この詩は虫と樹木のたとえによって、小さな悪が機構の中心を破壊してゆく恐ろしさを述べている。

木に棲む虫は、木の最も大切な所を狙って攻撃する。それと同じように、悪を倒すにもまた、最も肝心な所を攻めなければならぬ。「和答詩十首」の「答箭鏃詩」(卷二・128)は、弓を射る者に、「何不向西射、西天有狼星。何不向东射、東海有長鯨」と呼びかけ、こそ泥などを攻撃するのは無益なことだと警告する。狼星(星の名、大犬座シリウス星)と長鯨は、いずれも悪人のたとえ。いくら鋭い武器があっても、敵の首領を倒さなければ戦争には勝てない。ここには、悪の本命を打倒せよ、という白居易のメッセージがこめられている。

#### (4) 権威との癒着

どこの社会にも権威主義を振りかざすことの好きな人間はいるものだ。そういう人間は憎むべきである。そして、権威主義を隠れ蓑とする人間はもっと憎むべきである。「有木詩八首」其七(卷二・112)は、そのような権威と癒着した主体性のない人間——「附麗権勢、随之覆亡者」(序)を指弾する。

有木名凌霄 木有り 凌霄と名づく

擢秀非孤標 擢ひらんで秀ひらづるも孤ひとりり標たつに非ず

偶依一株樹 偶々一株の樹に依り

遂抽百尺条 遂に百尺の条うすを抽ひんづ

託根附樹身 根を託して樹身に付き

開花寄樹梢 花を開きて樹梢に寄る

自謂得其勢 自ら謂いう 其の勢を得

無因有動搖 動搖有るに因よし無しと

一旦樹摧倒 一旦 樹くだ摧たけ倒れ

獨立暫飄飄 獨立して暫く飄飄す

疾風從東起 疾風 東より起り

吹折不終朝 吹き折りて朝を終えず

朝為弘雲花 朝には雲を弘ひろう花と為り

暮為委地樵 暮には地に委かつる樵と為る

寄言立身者 言を寄す 身を立つる者

勿学柔弱苗 柔弱の苗を学ぶこと勿れ

凌霄（のうぜんかずら）という名の木は他の樹木に寄生して立っているために、もとの樹木が倒れるとひとりでは立つていられず、風に吹き折られてしまう。そのように、権威と癒着した人間は独力では何もできず、自分の依拠する権威が崩れ去ると、もろともに滅びざるを得ない。「為長社壇下、無人敢芟斫」、やしろの下に生えているので、誰も切り倒す者のない杜梨（あまなし）という木を詠じた「有木詩八首」其四（卷二・二六、池の水が日照りで干上がったために枯れた蘋（よつばうきくさ）と芰（ひし）を見て、「有似汎汎者、附麗權与貴。」

一旦恩勢移、相隨共憔悴」と歌う「秋池二首」其二(卷一・50)もやはり、權威との癒着を諷刺した作品である。<sup>(2)</sup>  
 (5) 派閥抗争

人間が集まるところには必ずと言ってよいほど派閥が生まれる。派閥の原理は団結と排除である。仲間同士は固く団結し、仲間以外を徹底的に排除する。そのような身内同士のつながりは、組織の紐帯を強化する反面、外部の新鮮な血を注入しないために内部から腐ってゆく危険性を常に孕んでいる。まして、派閥間の争いが人間不信の不毛な結果しか生まないことは言うまでもなからう。「和答詩十首」の「和分水嶺詩」(卷二・116)は、同じ源から発した水の流れが高い山の嶺を境に二つに分かれたために、海に注ぎ込む力も、草木を潤す力もなくなつたことを述べながら、「同出而異流、君看何所似。有似骨肉親、派別從茲始。又似勢利交、波瀾相背起」のように、それを人間世界の現象と比較する。これが派閥抗争の弊害を諷刺していることは見やすい道理だろう。馬徳懋「白居易寓言詩初探」によると、牛李の党争をたどえたものだと言う。

太田次男氏は、白居易が「牛僧孺と交わるときも、元稹と親しくするのも、ともに個人対個人としてであつて、党としてではない」と書いている。人は恐らく、党派に属することによつて失うものもあれば、党派に属さないことによつて失うものもある。白居易がいかなる党派にも属さなかつた理由の一つは、個人対個人の交流によつて得られるメリツトの方を重んじたためだと言えるだろうか。

白居易は世のため人のために諷諭詩を書き、詩人として社会に貢献しようとした。彼の目指したのは直接行動による政治改革ではない。近藤春雄氏は白居易の諷諭詩について、「それによつて政治が改まるなどということとは先ずなかつたようなのである」と述べているが、これはむしろ当然のことだろう。彼がもしも本気で世の中を改革しようと考えたのなら、詩を書くより直接行動に参加した筈である。文学が世の中を改革することなどあり得ないのだ。白居易の諷諭詩が現在の読者をも惹きつける魅力を持っているとするならば、それは決して社会批判を展開したためではなく、あくまでも芸術作品としてすぐれた価値を持っているためである。儒教的倫理性を

突き破る唯美的感性こそが白居易の本質と言うべきだろう。本稿で諷諭詩を寓言文学という視点から考察してきたのも、正にそのような理由に基づく。

## 九 『後集』における転回

『白氏長慶集』の四分類（諷諭詩・閑適詩・感傷詩・律詩）に関して、成田静香氏は知・情・意という概念を導入した立体的な解析を試みている。私は既に「動静交相養賦」及び発憤著書の説を例に取って、白居易の平衡感覚について述べたが、知・情・意を対等に重んじる『白氏長慶集』の分類方法自体が、白居易の平衡感覚の現れと見なすことができよう。最後に、平衡感覚という観点から、『白氏長慶集』と対比しながら『後集』について簡単に述べておきたい。

白居易の平衡感覚は、相対化による中立の思想と呼ぶことができよう。例えば、『折劍頭詩』で折れても真直ぐな劍がよいと詠じたが、『聞李尚書拜相因以長句寄賀微之』（卷十七・1052）では、

肯向泥中抛折劍 肯て泥中に向かいて折劍を抛たば

不収重鑄作竜泉 収めて重ね鑄て竜泉と作さざらんや

のように、折れた劍を修復して宝劍に鍛え上げることが歌う。竜泉は、宝劍の名。この詩は元和十三年（八一八）、江州時代の作品で、『白氏長慶集』に収める。白居易はここで、折れた劍へのこだわりを既に相対化している。このような軌道修正による相対化を徹底的に推進してゆくのが『後集』なのだと言つてよい。

『折劍頭詩』で白居易は「好剛不好柔」と詠じたが、『遇物感興因示子弟』（卷六十九・3639）では、「寄言処世者、不可苦剛強」「寄言立身者、不得全柔弱」と、剛と柔のどちらに偏ることも否定しながら、「于何保終吉、強弱剛柔間」、強弱剛柔の中間がよいのだと歌う。彼は剛へのこだわりを軌道修正することによって相対化したのである。

白居易は「酬元九对新栽竹有懷見寄」で、「不愛楊柳枝、春來軟無力」のように楊柳を輕蔑したが、「種柳三詠」

其一(卷六十五・3214)では、「白頭種松桂、早晚見成林。不及栽楊柳、明年便有陰」、年を取ったら松や桂を植えるより、すぐ育つ楊柳を植えた方がよいと、その価値を認める。また、「靡琴」で秦箏を非難したが、「偶於維陽牛相公處覓得箏、箏未到、先寄詩來、走筆戲答」(卷六十六・3286)では、「秦箏多好音」と誉めそやす。

その他、白居易は「哭劉敦質」「羸駿」「寓意詩五首」其一などで、賢者の視点に立つて賢者の受難に同情した。ところが、「自喜」(卷六十四・3076)では「自喜誰能會、無才勝有才」、「感所見」(卷七十一・3645)では「巧者焦勞智者愁、愚翁何喜復何憂」と述べる。彼は無能が有能に勝ることを強調するのである。このとき、白居易は賢者の視点から愚者の視点に転回したと言つてよい。

ある特定の感情が突出しようとする、白居易の中で方向転換することによつてそれを軌道修正する力が働く。これが中立の思想である。彼は『後集』において、そのような中立の思想を完結させたのだった。

恐らく白居易ほど、論者によつて評価の分かれる詩人は珍しいのではなからうか。例えば、小守郁子氏が白居易の否定精神の欠如を指摘しながら、「少しも一貫していない」と述べる一方で、下定雅弘氏が、「彼は自分の人生を生きる人間として、その生を充実させ支えてくれる思想と観念を求め続けたに過ぎない。そこに彼の一貫性がある」と書く。また、「詩魔」という言葉について、平岡武夫氏が「江州における彼の文学開眼を記念する言葉である」と述べる一方で、太田次男氏が「言葉の遊戯としての一面を認めざるをえない」と書く。このような評価の差異は一体どこから来るのだろうか。私は白居易の作品の本質は「反対物の熱狂的同盟」にあると思うが、このような作品の性格そのものが論者による評価の差異を生む必然性を内包しているのだと言えよう。

## 注

- (1) 川合康三「唐代文学」(興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』、世界思想社、一九九一)参照。
- (2) 白居易の寓言詩について論じたものに、銭基「論白居易の寓言詩」(『草地』一九五七年第十期)、馬德懋「白居易寓

言詩初探」(霍松林主編『全國唐詩討論會論文集』、陝西人民出版社、一九八四)がある。前者は、白居易の寓言詩が「比」「興」の表現方法にこだわるあまり、特に早期の寓言詩は詠物詩と区別しにくく、対象を擬人化する意識に欠けること、後者は、白居易の寓言詩の主流が江州左遷以前の諷諭詩にあること、白居易が寓言詩の表現領域の拡大に貢献したことなどを指摘する。その他、曹文江「九秦中新声、八珍中異味——試論唐代寓言詩」(鄭州大学学报「哲社版」一九八四年第二期)が、唐代寓言詩は中唐にピークに達したと述べながら(馬德懸にも同様の指摘がある)、その意義を封建階級の腐敗の暴露と諷刺に認めている。

以下、テキストは那波本を用い、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四)による作品番号を記す。制作年次、場所の記載も同書に基づく。また、朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八)を参考にした。

(3) 鈴木由次郎『易経上』(全釈漢文大系9、集英社、一九七四)によると、「物事の筋道がすらすらとよく通り、それがよく整い治まっていること。心に私欲がなく、心が純粹に天理のままであることを表す」。

(4) 顧学頤、周汝昌選注『白居易詩選』(人民文学出版社、一九八二)は、「作者以此比喻讀書人内中須有美德、須『直道』而行」と書いている。

(5) アーサー・ウェーリー、花房英樹訳『白楽天』(みすず書房、一九五九)は、白居易がこのようなつまらない地位を与えられた理由について、「白があまり有能な官吏だとは考えられていなかった、という可能性を勘定に入れることを全然忘れてはならない」と述べながら、「主として詩人として知られることは、公的生活では、一つのハンディキャップだったのである」と指摘する(第六章)。

(6) 堤留吉『白楽天研究』(春秋社、一九六九)は、白居易が色彩語として紅色に次いで白色を多く用いたことに触れながら、「白色は、清浄・清楚・純潔・潔白・純真・素朴・神聖・平和などの感情を起こさせるとともに、その性質上色相と彩度とを持たないので、明度のひどく近寄っていない限りは、いずれの色とも調和する色である」と述べている(第十二章、第二節)。

(7) 花房氏は元和二年(八〇七)と元和六年(八一)の長安の作、朱金城『白居易集箋校』は、丁居晦「重修承旨学士壁記」に「錢徽、元和三年八月二十六日自祠部員外郎充」とあるのを根拠に、元和三年(八〇八)と元和六年(八一)の長安の作とする。

(8) その他、鄧飭張徹落第詩(卷一・七)では、「衆目悦芳艷、松独守其貞」のように、大勢が派手な牡丹を喜ぶのに対し、ただ一人正義を貫く松の気高さを賛美する。元和三年(八〇八)、長安の作。

(9) 後年のことに属するが、白居易の正義感を示すエピソードを一つ紹介しよう。長慶元年(八二一)の七月、ウイグル族出身の王廷湊が反乱を起こし、成徳軍節度使田弘正が殺されると、田弘正の子、田布が魏博節度使を拝命、父の

- 仇を討つため任地に赴く途中、長安に立ち寄った。白居易は皇帝の使者として朝廷の意向を伝えるが、このとき、田布から五百匹の絹を贈られた。彼はこれを辞退し、朝廷からも贈物を受け取るように命令されたが、再度辞退した。田布はまだ父の復讐を果たしていないのだから、あらゆるものを彼に援助すべきであり、貴重な財源を受け取る訳にはいかなない、というのがその理由だった。白居易五十歳、長安で主客郎中、知制誥の任にあったときのこと。信念を曲げない気骨のある態度をよく伝えているよう。「讓絹狀」(卷四十二・1938)を参照。
- (10) 堂谷至暁「白楽天の諷諭詩の性格について」(大谷大「支那學報」第三十一号、一九五六)は、白居易の諷諭詩が彼の「剛直鄙介な性癖」によって貫かれていたことを指摘する。片山哲「大衆詩人・白楽天」(岩波新書、一九五六)が、「彼はおべっか、迎合主義が嫌い、独立自主が大好きである」(第十の四)と書くのも、同様の傾向を踏まえているよう。
- (11) 王汝弼「白居易選集」は、鯨鯢を藩鎮、蛟虬を宦官のたとえとする。
- (12) 西村富美子「白楽天」(鑑賞中国の古典18、角川書店、一九八八)は、この詩について、「これは、『曲全』型の役人たちに對する手厳しい批判であり、自らの生きる姿勢は変えずに、結果的には『折』となろうと、『直』を選ぶ詩人の氣概がはつきりと示されている」と書く。
- (13) この部分は、劉琨「重贈盧諶」詩の「何意百鍊剛、化為繞指柔」(『文選』卷二十五)に基づく。劉琨は、字越石、西晋の詩人。并州刺史となり異民族の侵入に對して抵抗するが、敗退し、幽州刺史の鮮卑族段匹磾のもとに逃れて、幽閉の後殺された。何度も鍛えた鋼鉄が指に絡まるほど柔らかくなるとは思わなかった、と詠じるのは、闘争の意志の衰えを比喻する。この句を反転させて、白居易はたとえ折れても剛直を貫く意志を示した。なお、劉琨については、後藤秋正「劉琨詩小論——『答盧諶』詩を中心として——」(『東京教育大学『漢文学会々報』第三十四号、一九七五)を参照。
- (14) 白居易の竹に関しては、堤留吉「白楽天研究」第十章、中西文紀子「白楽天の『竹』イメージについての考察」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第九号、一九九〇)を参照。
- (15) 王汝弼「白居易選集」に、「梧桐、比喻氣質脆弱、容易変節的人。楊柳、比喻趨炎附勢、奴顏媚骨之輩」と述べる。
- (16) 「孤直」については、赤井益久「元稹の文学理念について」(下)——元和五年を中心に——(『国学院大学漢文学会々報』第三十七輯、一九九二)を参照。唐代の詩人の用例を挙げながら、「人品・節操が高潔で堅固なさまを肯定的に述べている」と書く。
- (17) 王汝弼前掲書に、「這首詩は作者的自我写照」と言う。
- (18) 白居易の交友に関しては、堤留吉「白楽天研究」第六章、朱金城「白居易研究」(陝西人民出版社、一九八七)を参照。

- (19) 宋・洪邁『容齋隨筆』五筆、卷八、「白公說俸祿」参照。
- (20) 注(13)を見よ。
- (21) 花房英樹氏はこの詩を、元和二年(八〇七)と元和十年(八一五)、長安の作とするが、顧学頤、周汝昌選注『白居易詩選』は、貞元十九年(八〇三)頃、秘書省校書郎のときの作と見なし、「反映了作者重実質不重外表的思想」と述べる。
- (22) 西洋の例で言えば、山本光雄訳『イソップ寓話集』(岩波文庫)の「樅と木母」「薔薇と鶏頭」などがこのテーマに当てはまる。樅と薔薇は美しいために災難に出会い、それより劣る木母と鶏頭は危険を免れるのである。
- (23) 花房英樹『白居易研究』(世界思想社、一九七二)第三章、四、文学の基盤、三九六頁。
- (24) 花房英樹氏は、「生生の理」こそ、白居易の思想の頂点に立つ観念であり、その人生を運載して行く理念であり、その文学の底深くに流れている想念でもあった(前掲書、四〇二頁)と書いている。
- (25) 白居易と音楽の關係については、アーサー・ウェーリ、花房英樹訳『白楽天』第十一章を参照。
- (26) 岸辺成雄『東洋の楽器とその歴史』(弘文堂、一九四八)第二編、第一章、(二)、及び藤田貴枝子『白詩「五絃弾」考』(『諷諭詩における白居易の音楽観』(国学院大『日本文学論究』第三十三冊、一九七三)参照。
- (27) 「白楽天の限界——その否定精神の欠如——」(『白楽天と陶淵明』、丸善名古屋出版サーピスセンター、一九八九)。氏はそれを、「否定精神の欠如による破綻」と見なす。
- (28) 「白氏諷諭詩考——平安時代の受容をめぐって——」(『芸文研究』第二十七号、一九六九)。
- (29) 「与元九書」については、高木重俊『白居易「元九」に与うる書』——『諷諭詩』と『閑適詩』(『兼濟の志 独善の義』(伊藤虎丸、横山伊勢雄編『中国の文学論』、汲古書院、一九八七)参照。
- (30) 赤井益久「章応物と白楽天——諷諭詩を中心として——」(『国学院雑誌』第八十一卷第五号、一九八〇)。氏はこの点に章応物の寄与を認める。
- (31) 小守郁子「白楽天の限界——その否定精神の欠如——」。
- (32) 鬱鬱洞底松、離離山上苗。以彼徑寸莖、蔭此百尺条。世胄躡高位、英俊沈下僚。地勢使之然、由来非一朝。金張籍旧業、七葉珥漢貂。馮公豈不偉、白首不見招(其二)。貴族の子弟(山上苗)は才能がなくても出世し、身分の低い者(洞底松)は才能があっても出世できない不合理な現実を嘆いた詩。左思もまた、寒門の出身である。
- (33) 花房英樹氏は「続古詩十首」を元和六年(八一二)と元和九年(八一四)の作とするが、王汝弼『白居易選集』は貞元十六年(八〇〇)、進士に合格したばかりで、まだ任官していないときの作と見なす。
- (34) 花房英樹氏は貞元十七年(八〇二)、宣州の作とするが、今、朱金城『白居易集箋校』に従う。



- (35) 村上哲見『科率の話——試験制度と文人官僚』（講談社現代新書五九二、一九八〇）第一章参照。
- (36) 中国詩文選17『白居易』（筑摩書房、一九七七）六一・三頁。
- (37) 松浦友久「白居易における陶淵明（下）——詩的説理性の継承を中心に——」（『中国詩文論叢』第六集、一九八七）は、「適意」について、「白居易の全生涯を通観してみると、それは或意味でまさしく『適』を求めている人生であったと見なせるところに、『適』の理を説くこの詩の重みがあるわけである」と書く。
- (38) 本多秋五氏が『白樺』派の文学を批評した言葉（『白樺』派の文学「一、自己を生かす。新潮文庫、一九六〇」）。「ホガラカな自己肯定」（六、素質と環境）という批評なども、そのまま白居易に当てはまるかも知れない。
- (39) 金谷治「白楽天の精神」は、「貧乏な苦しい青年時代を過したからこそ、生活の安楽・快適さを求めることが烈しかったのかも知れない」と述べている。また、「快適な生活を求めることは、実は、生活の真実を求めることであった。人生には生きぬくべき価値があるという自覚、そして、そこからして生きることの喜びを獲得しようとする真剣な努力、それこそが白楽天の精神をささえる支柱であった」とも述べる。
- (40) 平岡武夫「白居易と賦」（『吉川博士退休記念中国文学論集』、筑摩書房、一九六八）は、「儒家と老荘の哲理を合せて人世観を説く」この作品について、「賦の文学の技術を最高度に發揮している」と記す。
- (41) 元稹の江陵左遷、及び白居易の「和答詩十首」については、平岡武夫「白居易」参照。
- (42) 袁伯誠「試論司馬遷的『發憤著書』說對諷諭文學理論的影響」（『固原師專學報』（寧）一九八四年第二期）は、白居易の「感時發憤」說が、新樂府運動の主要な理論上の武器となったことを述べると共に、「与元九書」の「六義四始」、諷諭怨刺說から、「序洛詩」の「憤憂怨傷」主流說への發展を、「溫柔敦厚」の伝統的な詩教觀を打破したものとして評価する。
- (43) 二宮俊博「白居易に於ける詩人薄命の認識について」（『中国文学論集』第八号、一九七九）は、調和的世界を閑適の境地の中で作りあげる白居易の觀照的態度を指摘し、「この觀照的態度をとりつづける限りにおいては、發憤說とは相容れぬ無縁の地平に立たねばならなかった」と書く。
- (44) 二宮俊博前掲論文。
- (45) 川合康三「韓愈と白居易——対立と融和——」（『中国文学報』第四十一冊、一九九〇）。
- (46) 吳功正「中国文学美学」形態篇三、模糊美学（江蘇教育出版社、一九九〇）は、「暮江吟」（卷十九・1291）の「一道殘陽鋪水中、半江瑟瑟半江紅」における、「半」の用法に注目しながら、それを「模糊意念」と呼んでいる（四三一頁）。
- (47) 同様の見解が、宋・蘇轍「書白楽天集後二首」其一（『樂城後集』卷二十一）、宋・晁公武「郡齋讀書志」卷十八、

別集類中などに見える。なお、王拾遺『白居易伝』(陝西人民出版社、一九八三)は、晁公武が白居易を「其風流高尚、進退以義、可想見矣」と評価したのに反論して、白居易の中立は、主にその「知足保和」の思想と「明哲保身」の処世方法によって決定されたのだと述べている(第十二章)。

(48) 「策林」三十五、使百職修皇綱振(卷四十六・262)で、「時議者率以拱黙保位者為明智、以柔順安身者為賢能、以直言危行者為狂愚、以中立守道者為凝滯」のように、「直言危行」と「中立守道」を軽視する風潮を嘆くのも、剛直と中立を等価と見なす考え方に立っているよう。元和元年(八〇六)、長安の作。

(49) 「紫藤詩」は元和五年(八一〇)、長安の作。王拾遺『白居易伝』によると、紫藤は宦官吐突承璀をたとえたものだと言う(第三章)。

(50) 鍾蔭、附樹作根。軟弱、須縁樹而作。蔭既纏裏、樹便死。且有患汁、尤令速朽也。藤盛成樹、若木自然。大者或至十圍。

(51) 王汝弼『白居易選集』、王拾遺『白居易伝』第三章、馬德懋『白居易寓言詩初探』など。

(52) 他に、「數魯二首」其「卷二・二」で「賦穩依社壇」と歌う。やしろのねずみは、君主の側に仕えているために、取り除くことのできない悪臣のたとえ。元和十一年(八一六)〜元和十三年(八一八)、江州の作。

(53) 中国の詩人⑩『白楽天』(集英社、一九八三)二二九〜二〇頁。氏は続けて、「それだけ、白居易は一步退いた立場を堅持した。見方によれば、それは孤独であることを意味し、それが、いつそう、他の人にはみられないほど、仏教などに近づくようにさせた。一因ともなったであろう」と書いている。

(54) 「白楽天の諷諭詩について」(愛知県立女子大学『説林』Ⅱ、一九五八)。他には、鈴木修次氏が「白居易の新樂府運動——『売炭翁』をめぐる——」(『唐代詩人論』下巻、鳳出版、一九七三)の中で、白居易の「新樂府」の批判精神のなまぬるさについて触れながら、柳宗元が「新樂府」運動に対して「まったくのノー・コメント」だったことを指摘している。

柳宗元は永貞革新の主要プレーンの一人である。白居易には永貞革新に参加できなかったコンプレックスがあった、と私は思う。彼にとって、直接行動の参加者柳宗元は恐ろしい存在だったろう。この柳宗元と白居易が遠い親戚に当たるのは、果たして単なる偶然だろうか。柳宗元は貞元十二年(七九六)、二十四歳で弘農の楊憑の娘と結婚している。この楊憑と同族の楊虞卿のいとこと、白居易は元和三年(八〇八)に結婚している。しかも、長慶四年(八二四)、洛陽の履道里に住んだとき、楊憑の旧宅を買い取ったのである。白居易は恐らく、楊憑と楊虞卿の背後に柳宗元の残影を見ていたのではなかろうか。彼にとって、柳宗元はそれほど気になる存在だったと言えよう。

(55) 『白氏長慶集』の四分類の成立とその意味(『集刊東洋学』第六十一号、一九八九)。

(56) 「白楽天の限界——その否定精神の欠如——」。

(57) 「白居易の文における老荘と仏教——その『長慶集』から『後集』以後への変化について——」(『禪文化研究所紀要』第一八号、一九九二)。

(58) 岡田充博氏に「『詩魔』について」(『集刊東洋学』第六十八号、一九九二)、「『詩魔』補考」(横浜国大『国語研究』第十一号、一九九三)があり、「詩魔」という言葉が、士人層の風雅・風狂の精神を母胎とし、中唐の詩人達の修辭的な欲求の下に生まれ育ったことを論じている。

(59) 中国詩文選17『白居易』三〇〇頁。

(60) 中国の詩人⑩『白楽天』一八九頁。

(61) モーリス・ブランショ、粟津則雄・出口裕弘訳『文学空間』(現代思潮社、一九七六)三一八頁。

なお、蜂屋邦夫氏は「白居易の道家道教思想」(『東洋学術研究』第二十七巻、別冊、一九八八)の注(2)で、「白居易がその生涯に執筆した詩文は、約三、八〇〇篇の膨大な分量にのぼる。したがって、資料の選択如何によって、正反対の居易像を描くことさえ可能である」と書いているが、「正反対の居易像」が成立するのは、詩文の分量の多さという表層的な理由によるのではなく、白居易の文学の本質に関わる問題なのだと言えよう。

〔付記〕 本稿は、平成四年度学内プロジェクト研究・助成研究(B)「唐代における寓言文学の研究」の研究成果として発表するものである。